

第四章 西南の役

一、西郷隆盛叛す

明治十年二月、前の近衛都督非役陸軍大將西郷隆盛九州に叛す。是より先き、明治六年征韓問題に關して、廟議二派に分れ、西郷隆盛は憤然官を辭して郷里鹿兒島に還つた。陸軍少將桐野利秋、同僚原國幹等皆辭して之に従ひ、私學校を起して、専ら郷黨青年の教育に従事した。明治五、六年の頃は、維新の鴻業畧ぼ成ると共に、政治上の勢力に、一大消長を生じたる時にて、志を中央に失ひ、滿々たる霸氣を懷いて野に潜める者は、皆西郷一派に限らなかつた。佐賀の亂、熊本の亂、秋の亂等、皆夫等の失意の士が鬱結せる滿腔の不平を洩らさんとしたものに外ならぬ。西郷の擧兵は、是等の徒とは稍や其趣を異にし事は決して西郷の志ではなかつたが、桐野以下私學校の幹部並に其生徒に擁せられて、遂に起たざる可からざるハメに陥り、二月十五日遂に慷慨決死の薩摩軍人一萬五千を率ゐ、政府に詰問の筋ありと稱し、鹿兒島を進發して北上した。九州諸藩の士の之に投ずる者二

千餘人、熊本・人吉の士族にして黨與する者池邊吉十郎以下千餘人に及んだ。

二、守城

形勢險惡なるを見て、鎮臺司令官谷少將は二月十四日諸將校を本營に會して、攻守の策を討議す。進んで之を薩界の險に要して撃破せんとする、所謂攻勢防禦の論も頗る有力であつたが、

「當城の兵、去冬不意の襲撃を受けしより、兵士の氣魄未だ全く舊時に復せず。賊徒素より強兵の名あり。加之縣下の士族賊に消息を通ずるもの少からず。故に進んで熊本市街を保護せんとすれば、賊脚下に生ずるの憂なきに非ず。且殊死の兇賊を平原曠野に防ぐ、其勝算固より期し難く、一旦遠へ戦うて敗るゝときは、遂に堅守を期し難し。兵數寡少、守る可くして攻むるに足らず……。」

萬全の策を採つて、議終りに守城と決した。蓋し熊本鎮臺の存亡は九州一圓の人心に關するを以て、大事の上にも大事を取つたのである。即ち二月十五日以降、着々守城工事に着手し、先づ火藥庫を岳の丸及び植方に作りて、敵彈の射入を防ぎ、新たに道路を開いて交

通を便にし、要所に地雷を埋め、橋梁を撤し柴柵を結び、砲壘を築造し、十八日傷病兵を山鹿の温泉に避けしめ、又罪囚を赦免して軍役に就かしめ(其の効功に依り)同日午後二時二十分、三發の非常號砲を以て各隊其の守地に就き、防禦作業を施す。

十九日午前十一時四十分、本城より火を發す。偶々西南の風烈しく、忽ち四方に延焼して、遂に天守臺に及び、將卒必死の防火に依つて、午後三時漸く鎮火するを得たるが、約三十日間の糧米は悉く烏有に歸した。唯だ兵器及び彈藥は、將校以下非常の奮闘に依り、逸早く安全の地に移したる爲め、遂に一彈をも損せざりしは不幸中の幸と謂ふべく、守城の功も之あつて始めて全たきを得たのである。

城中の火は飛んで坪井・上林の民家に及び、黄昏に至りて火勢益々激しく、四方に延焼して焰烟天を焦がし、光景悲壯を極めた。

一方軍吏は直ちに糧食の徵發に着手し、市街及び近村より兵力を以て續々城中に搬入す。

此の火災に依つて士氣は却つて大いに振つた。出火の原因は不明である。

午後五時、小倉屯在の歩兵第十四聯隊第一大隊の左半大隊入城す。

又、是日鹿兒島縣令大山綱良の添書を以て、左記書面を送附して來た。

拙者儀今般政府に尋問の廉有之、明後十七日縣下發程、陸軍少將榊野利秋・陸軍少將篠原國幹及舊兵隊の者隨行致候間、其臺下通行之節は、兵隊整列、指揮を可被受、此段及照會候也

明治十年二月十五日

陸軍大將 西 郷 隆 盛

熊 本 鎮 臺 司 令 官

司令官は素より一笑に附し去つて、同時に專使宇宿某外二名來たりて、參謀長樺山中佐(紀)に面會し、上京の趣旨書を齎らし且つ遊説を試みた(蓋し中佐は西郷)が、中佐亦更に耳を藉さず、兵器を携へて國憲を犯し強て臺下を通行せんとせば、兵力を以て鎮壓するの外無し、還つて之を西郷君に報せよと。所謂大義親を滅するもの、意氣頗る壯なるものあり。折から西京發左の電報に接し、士氣益々振るつた。

布 告

鹿兒島暴徒 擅ニ兵器ヲ携へ熊本縣下ニ亂入國憲ヲ憚ラズ叛跡顯然ニ付征討被仰出候條此旨相達 候事

明治十年二月十九日

太政大臣 三 條 實 美

勅書

朕卿ヲ以テ鹿兒島逆徒征討總督ニ任シ海陸一切ノ軍事竝ニ將官以下ノ勲陟賞罰舉テ以テ卿ニ委ス

卿勉勵從事シ平定ノ功ヲ奏セヨ

明治十年二月十九日

二十日夜半十二時、少警視綿貫青直の率ゐる東京警視隊四百名入城す。是時賊は已に其の先鋒隊を以て川尻に達し、斥候は城下に潜入してゐた。城中よりも下土斥候(長第三大隊)を川尻に派して、敵狀を偵察せしめた。城中外山崎、鹽谷町、京町等延焼尙ほ熄まず。是日城外山崎、鹽谷町、京町等延焼尙ほ熄まず。

司令官 少佐 奥 保 翠 隊 號

第一大隊第一中隊

下 馬

橋 巡查五番組(五〇)

山砲一門

指揮官

大尉 福原 豊 功

警部 池端 蛙

曹長 貴志 一郎

漆畑及野砲營	野砲一、山砲二	巡查三番組	第三大隊第三中隊	山砲一、白砲一	巡查二番組	第三大隊第二中隊	野砲二、山砲一、白砲一	巡查一番組	第三大隊第一中隊	野砲二、山砲一、白砲一	藤崎神社	小川 又次	大尉	司令官	法華坂二ノ丸	山砲二	第一大隊第二中隊	第一大隊第二中隊	第一大隊第三中隊	古 城	山砲二、白砲二	巡查四番組	第二大隊第四中隊	縣 廳	
大尉	警部	大尉	少尉試補	警部	大尉	警部	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	少尉試補	中尉	中尉	大尉	中尉	警部	警部	中尉	警部	中尉	警部
左乙女英武	赤羽友春	寺内清祐	河井清信	池田清秀	瀧川忠教	川路利行	大崎長寛	小島政利	小島政利	小島政利	大崎長寛	大崎長寛	大崎長寛	大崎長寛	田原鑑一	山本盛英	岡本一布	隈本一布	高岡長道	渡邊信明	不邊佳介	不邊佳介	不邊佳介	不邊佳介	

司令官 少佐 林 準之助

埋門 捧安坂 第一大隊第二中隊
巡查六番組

山砲一、白砲二

千 葉 城 第一大隊第四中隊
野砲一、山砲一

岳 ノ 九 第二大隊第三中隊

此の外、左記には砲のみを配置す

新野砲兵營 山砲一、白砲一

飯 田 丸野砲二、白砲一

乃ち當聯隊を以て、守城の主力とし、歩兵第十四聯隊第一大隊左半大隊を豫備隊とす。

三、聯隊長戦死

二月二十一日午前一時、敵偵察の目的を以て(爲し得れば川尻)隈岡・小島の兩中隊を派遣し、
たるも、目的を達せずして歸還し、同日午前七時頃、賊は其尖兵を以て臺下に侵入し、坪

大尉 宮崎 定毅
警部 加藤 清明
少尉 補佐 藤 榮信
大尉 小葉 竹直綱
少尉 尉 小出 正直
中尉 尉 佐武 廣命

少尉 試補 村上 上 慧

井町通りを通行しつゝあるを見て、岳ノ丸及び千葉城の砲兵之れを砲撃し、敵も亦應戦す。これを此役の初戦とす。下馬橋を撤去し、尙ほ城外にありて障礙となる家屋を焼いて展望を便にした。

二十二日午前六時、賊兵城の東南即ち安巳、長六の二橋より前進し來たる。下馬橋の砲兵の轟撃に遇ふて千葉城に轉せるも、再び撃退せられ、一隊は京町及び錦山方面より埋門に迫り、又午前七時高田原より前進して下馬橋に肉薄し、他の一部は山崎及び新町方面の燒跡より懸懸並に藤崎神社を襲ひ、四方地村附近の敵は片山邸を攻撃し、各方面より一時に殺到して來た。蓋し敵は開戦の劈頭、我が守兵の寡少なるに乗じて、勇猛果敢に突進し、一擧して熊本城を拔き、武威を四方に輝かせて以て天下の大勢を決せんと企圖せるものゝ如く、二十二日より二十三日に亘りて、其の攻撃最も熾烈を極め、二十二日朝參謀長 樺山中佐は藤崎神社に於て、聯隊長與倉中佐は片山邸に於て、共に敵彈に中りて負傷し、殊に聯隊長は頗ぶる重傷にて、二十三日午前一時城内病院に於て歿した。爾後川上少佐(聯隊長)の指揮を執つた。

(谷少將夫人、與倉中佐夫人等五六の夫人、共に籠城し、與倉夫人此の日恰かも一女を生

む。谷少將乃ち名親となつて幹子と名づく。聯隊の將卒之を聞き、悲喜交々臻る。當時敵は大砲六門を有し、花岡山、四方地村、長六橋及び安巳橋に各一門を配し、他の二門は隨時各所に移動して砲撃し、二十四日以後其の攻撃は稍や緩となりしも、尙ほ晝夜を分たず各方面より來襲し、日々數回の戰闘行はれざることなく、時々は我よりも出撃して敵の陣地を襲撃した。就中段山に據れる敵は、其の兵力優勢なるのみならず、頗ぶる標槍、屢々勇猛に襲撃して來た。然しながら我が守兵も亦頗ぶる剛勇沈毅、協心戮力して防戦に努め、毎に敵に多大の損害を與へて擊退した。

二月二十六日夜、城中防戦の狀況を征討軍に報じ、且つ之れと連絡せんが爲、第一大隊第二中隊伍長谷村計介を高瀬に派遣す。伍長は苦心慘憺、途中幾多の困難を経て、三月三日第一旅團司令部に到着して其の使命を完了した。

賊徒掃蕩の大詔煥發と共に、征討旅團は左の如く編成せられ、續々として戦地に送られた。蓋し正面軍は博多に上陸して、往々往々賊軍を破つて南下し、別働旅團は八代灣日奈久附近に上陸し、北上して賊の背面を衝き、兩面より齊進して、熊本城の圍みを解くのが、第一期作戦の主眼にして、

三十歩 (44)

0100

正面軍

- 征討第一旅團 (長、少將 野津 鎮雄)
- 同 第二旅團 (長、少將 三好 重臣)
- 同 第三旅團 (長、少將 三浦 橋樓)
- 同 第四旅團 (長、少將 大山 巖)

側背軍

- 別働第一旅團 (長、少將 高島綱之助)
- 別働第二旅團 (長、少將 山田 顯義)
- 別働第三旅團 (長、少將 川路 利良)
- 別働第四旅團 (長、代理大佐黒川通軌)

此の外乃木少佐(希)は歩兵第十四聯隊の主力を率ゐ、鎮臺に入るの目的を以て前進中、植木驛附近にて敵の沮止する所となり、爾後征討軍の一部に加つて戦闘を繼續しつゝあつた。

四、段山の激戦

二月二十七日、大迫大尉(敏)約一個中隊半の鎮臺兵・巡査の混合隊を率ゐて、坪井の草場學校に在る敵に向つて襲撃を行ひたるも、敵火熾烈にして遂に目的を達せず、大迫大尉傷きて歸る。

三月一日城中の貯米を算するに六百六十六石七斗にして、一日の消費量は約二十九石なるが故に、自今辛じて二十二日と三分ノ二を支ふるに過ぎず。三月二十三日の午食を以て絶

食の運命であつた。

三月二日第十四聯隊の兵を守線に加へたる結果、各隊の配備若干變更せられた。

三月三日四方地村の敵壘に、軍旗の如き旗を掲ぐるを見て、城兵大いに怪しむ(蓋し第十四聯隊落ちたのであつた)。

此頃より城内煙草盡き、茶を以て代用す。

三月十一日、段山の敵兵矢文を烏郎の守地に送り、且つ同文の宣傳書を線外各所に揭示して、我が城兵を誘惑せんとす。曰く「我衆將ニ日ヲ刻シテ城ヲ屠ラントス」「山鹿・高瀬諸道ノ軍ハ我已ニ悉ク之ヲ撃破ス」各縣ニモ義兵起リツ、アリ「我兄弟等ヨ、誰ガ爲ニ孤城ヲ守リ、糧竭キ、援絶ニ、殆ト累卵ノ危キニ至ルヤ」と。忠勇なる我が城兵には一人としてかゝる宣傳に乗せらるゝ者は無かつたが、安藤少尉及び池端警部は、矢文を見て慷慨禁ずる能はず、濁酒を酌んで段山攻撃の協議をなし、同日午後四時各手兵を提げて卒然段山に突撃した。然れども事頗る急に出で、且つ他隊との間に連絡も通じて居無かつた爲め、忽ち優勢なる敵の逆撃する所となりて、安藤少尉池端警部共に戦死し、且つ敵兵我が敗兵に尾して、守線に突入せんとし、殊死防戦黄昏に至りて辛じて撃退したるも、戦間は夜を徹

して翌日に互り、十二日も終日小戦開行はれ、川路警部・小林中尉・山本中尉・高並少尉・澁谷少尉・試補等各手兵を提げて交々肉薄したるも、我は兵力寡少にして配布全からざるに、敵は漸次兵力を此方面に増加して堅守せるが故に、一も其の目的を達せず、却つて敵は全線に互つて活躍を開始し、一齊に城中を包撃した。戦間引續き十三日に及び、朝來第一線の兵を交替し、新鋭を以て猛烈に攻撃を續行したが、依然目的を達せず、大庭中尉の指揮する一隊は一時段山右側山上の胸壁を奪取したるも、久しからずして放棄(同中尉)するに至り、澁谷少尉・試補隊警視隊二小隊と共に、銃箱を揮ひ、吶喊して敵最前數歩の近距離に迫つたが、多大の損害を蒙つて撃退せられた。

午後二時に至り、聯隊長心得川上少佐來たりて此方面の戦線を指揮し、小川大尉をして若干部隊を指揮して正面より迫らしめ、丸井大尉をして一小隊を率ゐて右翼非井川を潜行して段山の背後に迂回せしむ。小川隊は非井川に潜伏せる敵の狙撃隊を驅逐し、之に尾し銃剣突撃を以て背後より突入し、正面軍亦火を放つて突撃したので、敵兵狼狽、策の施す所を知らず、多數の死傷者を遺棄して四方地・島崎方面に潰走し、午後三時兩隊は確實に段山を占領した。

此段山の戦間は十一日午後四時に起りて、十三日午後三時に至りて始めて止む。實に守城
中第一の激戦にして、此間に於ける

勝隊の損害

戦死將校以下四十名

負傷同 九十三名

替現隊の損害

戦死野部以下二十一名

負傷同 六十七名

敵の戦死者は尠くも百を下らざるべく、我が軍に於て埋葬せる屍體のみにても七十三の多
數に上つた。

段山占領後、片山郎の山砲二門を此に移し、胸壁を設けて、假設砲臺を構築し、且つ井芹
川の下流を塞ぎて段山の前面に水を湛へ、併せて漆畑前面の田圃に灌漑し、以て敵の侵
入を防ぎ、此の方面の守兵を減す。

十四日谷少將より感状を授與せらる。

段山に敗れたる敵兵は花岡山に據り、同山下石塘口に於て井芹川と坪井川の合流を堰いた。
之が爲め井芹川の河盃・段山及び野砲營前面の田畑は悉く漲溢して、恰かも一大湖水の如
くになつた。是れ素より段山の一戦に意氣沮喪せる敵が、城兵の出撃に備へたものであら
うが、却つて我をして此方面の守兵を減じ、他日出撃の英氣を養はしむる結果となつたの

である。

〔京町口の激戦〕 爾後も戦間は口々絶えず、二十三日未明藤崎少尉・今橋少尉・立石中尉・黒澤中尉等は各一小隊内外の兵を率ゐて、京町口・日向崎・牧崎・寺原等を急襲し、敵の狼狽に乗じ壘を毀ち家を焼いて歸つた。

二十六日諸將校議して曰く、「數日來、正面軍方面の銃砲聲漸く近接し、晝夜猛烈の戦闘を繼續せるものゝ如し、宜しく城中より出撃して、敵をして後方を顧慮せしめ、以て我が征討軍の攻撃に策應すべし」と、二十七日左の如き部署及び方略を以て出撃す。

正

面

右翼 歩一四ノ第一大隊第四中隊・警視隊六番組・山砲二
左翼 歩二三ノ第一大隊第一中隊

指揮官林少佐、三年坂及出京町の敵壘を突く

別

働 隊 歩一三ノ第三大隊第四中隊

長、三木中尉。參謀黒澤中尉。牧崎より井芹村の砲臺を抜く

迂

回 兵 歩一三ノ一小隊と警視隊三番組

本妙寺を衝き行く行く胸壁を毀ち井芹に至り本隊に合す

正面軍として裏京町に向へる丸井・北川の兩中隊は、中坂附近に於て最も猛烈なる市街戦を

惹起した。乃ち敵は坂上の土蔵及び胸壁に據つて頑強に抵抗し、我は敵壘を去る十米突に過ぎざる竹藪に據りて對戦し、將校及び警部の如き銃を携へざる者は瓦石を取つて擲つなど接戦苦闘中、臼砲一門來援し、且つ星加小隊敵の背後を衝ける爲め、敵は遂に壘を捨てて敗走し、我は之を追撃しつゝ、柳川町に至り、此間七八の胸壁を奪つて悉く破壊し、日夜兵を收めて歸城した。但是日別働隊方面の攻撃は餘り成功せず終つた。

此日の戦間に於ける損害、死傷總計百四十三名

(内、鎮守兵九十二名、警視隊五十一人)

五、第一大隊の突圍

日を経るに従つて敵勢は漸く銷沈し、彼より來襲することは甚だ稀であつたが、城中の情況も亦漸を追うて悲惨になつて來た。蓋し彈藥(殊に)と糧食との缺乏である。これは豫め覺悟せる所であつたから、當初敵彈の炸裂せざるものは、悉く拾ひ收めて我が用に供しつゝあつたが、三月下旬に至りて砲彈の缺乏は益々甚しく、僅かに演習用の殘彈を利用し、信管に代ふるに木栓を以てし、門線を造つて摩擦管に代用するに至つた。

三十歩 (50)

0106

糧米の方は、會計部は勿論一兵卒に至るまで、殆んど全力を盡して之が蒐集に努めたる結果、三月二十二日午後を経過しても餓死するやうの事なく、四月四日現糧を算したるに、米・粟及び小麦を合して二百七十五石六斗四升を得た。乃ち司令官規定して曰く

一、今後各官廩は、朝夕二餐は粥を用ひ、晝餐は粟飯を用ひ

一、各隊は朝餐は粥、晝夕二餐は粟飯を喫し

一、工兵隊及役夫は總て粟飯を食すべし

と。如斯すれば一日の消費量十五石五斗四升七合にて足り、明日より後十八日間、即ち四月二十二日迄維持することが出来る勘定で、同日以後之れを實施した。之が爲に毫も士氣を沮喪することなく、一難の加はる毎に不撓不屈の精神愈々堅きを覺えたのである。

然れども糧食彈藥は限りあり、救援軍は未だ一騎も市内に入らず、果して何の日に來着すべきか、俄に逆路すべからずである。爰に於て四月七日谷少將は突圍の策を提議した。蓋し約半部を城に残して防守に充て、自から半部を率ゐ敵の重圍を突破して征討軍に連絡せんとするものにて、連絡若し成らずとするも、城中の兵食に餘裕を生じ、守城の期日を延長するを得べしと云ふにあつた。諸將何れも突圍の策には双手を舉げて賛成したが、司

令官自から陣頭に立つを非なりとし、參謀長樺山中佐往かんと云ふを、谷少將許さず、遂に我が第一大隊長奥少佐其の選に當り、兵力も一大隊と決し、其の部署及び方略を左の如く定めた。

突 田 隊(長、奥 少佐) 歩一三の第一大隊

安巳橋より圍を銜いて川尻の援軍に合す

侵 襲 隊(長、小川大尉) 歩一三第二第三大隊の第二中隊・歩一四ノ一中隊・警視隊

五番組

安巳橋を襲ひ突出隊の進出を掩護す

豫 備 隊(長、林 少佐) 歩一三第二大隊の第三・第四中隊

突出隊の將卒は各自外套を携へ、草鞋を穿ち、縋滑。リントを懷中に、糧食として餅四個握り飯一個及び馬肉五十匁、水筒には焼酎を盛り、準備全たく成るや、去留の人互ひに相袂別し、無量の感慨に打たる。

八日午前四時、侵襲隊先づ枚を啣んで岳ノ丸東側の城外に集合し、時の到るを待つ。東天漸く白み叢林の鳥方に鳴かんとする頃、岳ノ丸の守兵は遽然として射撃を開始した。敵は

不意を撃たれて倉皇退却を始む。侵襲隊乃ち銃に剣を装し、匍匐潜行して之れに追尾し、白川右岸なる敵の守線を距る二百米の地點に達したる時、始めて敵の發見する所となり。彼は直ちに非常を報じて警急集合せんとしたが、我は敢て一彈を放たず、白兵を揮つて疾風の如く敵壘に突入し、忽ち其數名を斬り棄て、一舉に數壘を奪取した。

奥少佐の指揮する突圍隊は、此機に乗じて、銃劍を揮ひ、身を砲烟の裡に挺し、吶喊して河岸の壘に至り、直ちに安巳橋の上流百米の地點にて渡河す。敵は新屋敷及び迎町方面に遁逃し、侵襲隊は益々猛烈果敢に之を追撃しつゝある。乃ち突圍隊は速かに敵線を脱し、朝霧に包まれて水前寺村に到り、園内の一亭に火を放ちて、城兵に其の進路を報じ、是より八丁馬場を右折し、健軍村・中無田村を経て六嘉村に到りて暫らく休止し、爾後路を御船街道に取りて、萬願寺村・緑川を経て隈ノ庄に至りて旅團選抜隊の斥候に會し、同日午後四時宇土驛に達して、遂に衝背軍に合するを得た。

突圍隊の已に水前寺を過ぐるや、侵襲隊は追撃を中止し、且つ戦ひ且つ退きつゝ、午後四時城中に歸還した。かくて突圍は見事に成功せるのみならず、九品寺村の村庫に於て精米一千三百餘石を獲て、之を城中に運び、尙ほ小銃百挺彈藥凡そ三千發を鹵獲し、敵兵四名を

三十歩 (53)

0109

俘虜とした。

六、重圍解く

四月九日砲廠部は野戰器具材料を修理せんが爲、我が歩兵用の隨操器械を壞ちて之に充つ。以て城中窮乏の一端を推測することが出来る。十日谷少將は愚劣の爲め將校以下に酒肴料を附與し、且つ今や敵の敗散目前に迫れると同時に、彼れ或は窮鼠の勢となり、殊死して決戦を求め來たるやも計り難し、自今益々警備を嚴にして、千仞の功を全うすべき旨を訓示した。

十一日谷少將は段山砲臺を巡視中、敵の狙丸に中つて負傷した。十四日拂曉より川尻方面の賊聲甚だ近づき、援軍將に到らんとしつゝあるを察し、之に策應して敵を挾撃せんが爲め、

第二突圍隊(長、林少佐)

第一大隊(第一中隊隊長)及巡查二小隊

を編成して待つ。正午頃城外各所に火起り、尋て花岡山、長六橋等の敵積々自から圍を解いて退却を始めた。

仍て林少佐突圍隊を率ゐて坪井方面に出で、之を追撃せんとしたるに、出京町・建町附近の敵兵尙ほ頑強に抵抗し、交戦黄昏に及ぶ。是より先き午後四時、俄然臺下に激しき銃聲起ると共に、一軍隊伍肅々として長六橋に前進して來た。城兵「敵か味方か」と凝視しつゝある間に、既に山崎に至り、其の服装に依りて我が救援軍の將卒であることを知つた。

一隊は下馬橋に來たりて叫んで曰く、

「山川中佐(橋)の隊、川尻の賊を破つて來たる」

と、俄に撤したる下馬橋を修理して、城内に延く。次で目賀田中尉の指揮する教導團の選抜中隊が到着した。城中の兵、孤城を固守すること五十有三日、千辛萬苦、遂に其の任務を全うして、援軍を迎へ得たる歡喜は、到底筆舌の能く竭す所でない。

直ちに小夜食を焚いて、入城の將卒に給し、且つ賄所に令して曰く、「明日より粥及び粟飯を廢し、米飯を給すべし」と。

十五日植木口第二旅團の近衛兵を先頭に、正面軍及び衝背軍の諸隊悉く熊本に入り、奥少佐の突圍隊も御船を發し、途中邊場山の賊を撃破して、午後四時屯營に歸つた。十六日

勅使(待從唐)を差遣せられ、左記優渥なる御沙汰書と共に、御慰勞の思召を以て酒肴料を下賜せられた。

陸軍少將 谷 干 城

鹿兒島縣賊徒益兇暴ヲ選シ熊本城ヲ圍ミ攻聲ニ及ヒ候處殊ニ力戰屢賊軍ヲ破リ能ク孤城ヲ堅守候段 叡聞ニ達シ深ク苦勞ニ被思召候依テ爲慰勞酒肴下賜候猶此上奮發兵士ヲ率テ勵シ平定ノ功ヲ奏スヘク旨御沙汰候事

但 士官兵隊等ヘモ相達スヘク事

尙ほ皇太后・皇后・兩陛下よりは綿撒糸・白木棉・煙草・葡萄酒等を下賜せられた。殊に綿撒糸は畏くも兩陛下が女官と俱に御手づから撒かせられたものであつた。

征討總督有栖川宮殿下には平岡少佐(作)を御使として『永々の守城、一同勉強大儀の旨』御沙汰あらせらる。

守城中に於ける損害

△戦死 勝隊長以下百二十七名

△負傷 谷少將以下四百六十八名

(此外野戰隊死傷百七十八名)

七、健軍附近の激戦

敵は熊本の包圍を解きたるも、未だ遠く去らず、木山を中央として左は御船に據り、右は
大津に及び、健軍・保田窪に第一線を張つて防備甚だ嚴に、機を見て攻勢に轉せんとするも
のゝ如くであつた。依て我軍は大舉して此敵を攻撃するに決し、右翼は別働第一第二旅團
を以て隈庄より、別働第三旅團を以て甲佐地方より、共に郡見坂及び御船に向ひ、中央は
我が熊本鎮臺城を出で、健軍の敵に當り、別働第五旅團は保田窪を攻む。左翼は第一第二
旅團竹迫より植木を経て進み、第三旅團隈府を抜いて共に大津に向ふ。此戦役中、同時に
斯の如き大兵力を用ゐたのは實に空前絶後であつた。

十六日木山附近偵察の目的を以て前進せる第三大隊第一中隊は砂取町に至りて停止し、次
で同夜第二中隊之に増加し、第三大隊(三中隊)は本村天満宮附近に進んだ。聯隊(長(少佐)は十
九日朝第一第二大隊を率ゐて屯營出發、砂取町に進進し、二十日午前四時第二第三大隊を
第一線、第一大隊を豫備とし歩一四と協力して右翼別働第二旅團、左翼別働第五旅團に連
繋し、其の中間二十町餘の廣正面を以て健軍に前進し、交戦數時、午前十時八丁馬場南方

の一壘を抜いたが、久しく保つ能はずして放棄し、更に第一大隊を第一線に伍間増加し、塹壕を築いて戦ふこと更に五時間餘、三木・山本の兩中隊は午後三時帶山の敵壘に向つて決死の銃劍突撃を實施し、右方の數壘を奪取し、敗敵を小峰原附近に退撃して、午後五時防禦線に歸つた。是日健軍の防禦堅固にして容易に抜き難く見えた。

午後六時頃、保田窪の賊大舉別働第五旅團を擊破して連絡を遮斷し、更に我が左側背に來襲した。是時第三大隊第三中隊長寺内大尉(補)は極めて沈着なる態度を持ち、愆々其の左翼を矩形に退けて敵の近接するを待つた。敵の兵力は凡そ七八百にして、火白兩兵を用ゐる哨喊して戦線二十米突の地點まで肉薄した時、大尉は命令一下、一齊に火蓋を切り、銃身も割れよとばかり猛烈熾盛なる射撃を浴びせ、立所に其の數百名を殺傷し、敵勢ひるむを見るや直ちに銃劍を揮つて之に突撃した。賊乃ち周章狼狽、保田窪を指して潰走し去つた。此の戦間期なる時、聯隊長川上少佐は頭部に、大隊長小川少佐は腹部と股部に銃劍を受けた。

敵兵隊退後、愈々防禦工事を嚴にし、夜を徹して警戒に従事す。別働第五旅團とは遂に連絡せず。

是日の戦闘は、各方面共に頗る激烈を極め、終には銃剣を棄て格闘して雌雄を決するに至り、殊に健軍・保田窪附近の敵壘を検するに、一壘少くも二十餘の伏屍累々と横つてゐた。

此日の戦闘に於ける聯隊の損害

△戦死 中尉小林清吉、高並運壽。少尉富富時宜、沼田政次。少尉試補宮田綱條。下士卒四十五名

△負傷 聯隊長以下將校十六名。下士卒百八十八名

二十一日午前三時、別働第五旅團は全線突撃を以て保田窪の敵線を撃破した。然れど我は未だ之を知らず、五時頃に至り我が正面の射撃場に裏へたるを以て、斥候を健軍に派して偵察せしめたるに、敵兵已に壘を棄て、退却してゐた。依て敵を追撃しつゝ前進し、同夜第一第三大隊を第一線として小峯原に哨線を張り、第二大隊は健軍に宿營した。

三十歩 (50)

八、豊後口の戦闘

熊本城外の決戦に敗北したる敵は、二方面に分かれて、一は人吉に向かひ、一は三川井方面に退却した。乃ち聯隊は三川井に走れる敵を追撃して、爾後濱町を経て馬見原附近に

0115

行動しつゝあつたが、五月十四日、日向地方に屯集せる賊兵豊後重岡・竹田方面に進出し、夏に久住の險を扼せんとし、中津の土族等之に呼應せんとすとの情報に依り、豊後竹田方面に轉戦を命ぜられ、十七日第一大隊の先頭を以て馬見原を發し、惠良原を経て玉來・竹田に向つて前進し、二十三日豊肥の國境を越え、爾後、

左 翼(長、小川少佐) 久住街道より

中 翼(長、大道少佐) 竹田街道より

右 翼(長、福原大尉) 玉來街道より

の三縱隊となり翌夜に進出し、往々其の前進陣地たる多数の堡壘を陥れて、二十八日竹田附近に達し、二十九日未明竹田城を包圍し、一舉して此の天險の堅城を拔く。賊市街に火を放ちて、一は三重町に一は重岡に走り、尙ほ日向より續々重岡に入れる諸隊と共に臼杵を討し、同地の土族隊及び巡查隊の抵抗を排して、六月一日臼杵城を占領し、進んで大分を襲撃せんとした。依つて聯隊長は奥少佐の第一大隊をして重岡方面を警戒せしめ、自から聯隊の主力及び歩一四の第三大隊を提げて臼杵の攻撃に向かひ、警視隊と協力して、六月八日臼杵・再進越・白山越・松原時・吉野越及び野津市口の六道より攻め

入り、同日より三日間に亘りて猛烈に攻撃したるも、賊勢猖獗にして容易に陥らず、十日未明警固屋港よりする海軍の掩護射撃に次いで、一隊を姫路峠に大迂回せしめて敵の背後を衝かしめたる爲め、遂に支ふること能はずして、平清水・白杵の市街に火を放ち、その烟焔に依つて退路を蔽ひ、海岸の間道より津久峠を越えて佐伯方面に潰走した。

此戦間に於ける聯隊の損害

△戦死 少尉試補有馬純晴以下七名

△負傷 大尉平佐良茂以下三十四名

一旦佐伯に遁がれたる敵は、間もなく重岡に去り、重岡は豊後・日向方面に於ける敵の據點となつた。依つて聯隊は又此の方面に轉じ、六月十二日重岡を包圍し、爾後五日間に亘りて攻撃を續行したが、賊は魏峨たる山上に堅壘を築いて、守備頗る嚴、容易に抜くことができない。聯隊長乃ち十七日各隊を激勵して決戦を行ふ。是日正面攻撃の任に當れる第二大隊長林少佐、第四中隊長代理佐武中尉を招き、三國峠の正面堡壘に對して強襲を命じた。

中尉乃ち欣然命を受け、軍曹川野邊常松以下伍長二、卒十四を以て決死隊を編成し、自ら

之を率ゐて午前二時三十分暗に乗じて發し、哨兵の射撃を受けたるも敢て應射せず、正面第一壘を指して潛進し、不意に白兵を揮つて壘内に突入し、縦横馳突して立所に十二名を斃し、先づ第二壘を奪つて第二壘第三壘に迫る。之を見て諸隊一齊に攻撃前進し、三國峠の諸壘將棋倒しに陥いる。是日壘を抜く十箇所、險路を踏むこと五里餘、實に疾風枯葉を捲くの感があつた。而も決死隊中傷くもの僅かに一名、佐武中尉の指揮宜しきに適ひ、川野邊軍曹以下勇猛沈着なるに由る。拔群の功に依り臨時褒賞を與へられた。爾後連日の攻撃に堪へず、二十一日味爽賊は重岡の壘を棄て、國境を越えて日向に走つた。即ち諸隊重岡に入り、爾後七月末日に至るまで、國境の險を要して相對峙し、要所に哨兵を配置し、防禦工事を施し、其の守線重岡を中心として右翼柳ヶ瀬より、左翼黒澤に至る日豊の國境十餘里に亘つた。

此の間敵は、六月二十四日未明暴雨烈風に乗じて、赤松峠及び豆蔻峠の我が兩哨所を急襲し、更に七月三日午前三時約二千の大集團を以て、梓峠及び大時の哨所を部襲し、何れも我が哨兵は一時守線を放棄するの餘儀なきに至つた。諸隊の増援に依り、奮戦健闘して戦線を恢復したることは勿論であるが、毎回多大の犠牲を拂ひ、此の對陣中に於ける損害

三十歩 (97)

0118

は三百二十名の多数に上つた。乃ち。

△戦死 大尉宇多瑞穂以下七十四名

△負傷 將校以下二百十一名

外に死傷三十五名(此分は死と傷との區別つかず)

八月二日暴雨を冒して全線一齊に前進を開始し、萩ノ峯・小田・勝ヶ峯を占領し、三日松尾山・赤木山を占領して、友軍第一旅團及び別働第一旅團の進出を待ち、八月十五日未明大舉して敵壘に迫れるも、敵は已に壘を棄て、可愛嶽に遁れた後であつた。

聯隊は同日熊田附近に集結し、十七日第一第二第三及び新選旅團と共に可愛嶽を包圍し、十八日未明を期して一齊突撃し、今度こそは賊將西郷の首を見ずんば已まずと、勇躍して攻撃を準備しつゝある時、西郷は自から精銳なる手兵を提げて、第一第二旅團中間の哨線を突破して、長蛇は遂に鹿兒島を指して逸し去つた。

九、賊徒戡定・凱旋

八月二十三日、聯隊は竹田より熊本地方に轉進を命ぜられて、三十日川尻に集結し、第一大隊を熊本城に残置して、爾餘を以て鹿兒島に前進し、松橋・米ノ津・宮ノ城を経て九月六

日武村の大明神山下に到りて、城山の合圍線に就いた。乃ち我が征討軍は敵を城山に壓迫して三重三重に包圍し、攻撃準備を整ふること旬日、九月十九日諸將を牙營に會して、攻撃の部署を定めた。乃ち全軍を分ちて、攻撃隊と合圍隊の二と爲し、合圍隊は山麓を包圍して、専ら敵の逸出に備へ、攻撃隊は、各旅團より約一中隊宛を簡拔集成し、一人に付百五十發乃至二百發の彈藥を準備せしめ、其の指揮官は左の如く任命せられた。

△第一旅團遠征攻撃隊陸軍少佐大島久直。△第二旅團同吉田道行。△第三旅團同川村景明。△第四旅團同大沼浩。

△別働第一旅團同坂井重季。△別働第二旅團同河野通輔。△新選隊同立見尙文。△熊本鎮臺同山根信成。

而して、其の軍令の嚴にして、用意の周到なることは諸官會議の申合せ中に、

「攻撃兵其目的ヲ達スルコト能ハズシテ退却シ賊徒之ニ尾シ急襲突出セントスルコトアルトキハ合圍兵ハ彼我ヲ分タズ之ヲ銃撃シ以テ賊徒ヲ却クベシ」

とあるに由て、其の一斑が窺ひ知られる。二十四日午前四時、殘月西空に傾き、白露地に濡ちて冷か也。合圍の號砲三發、寂寞を破つて轟き渡ると共に、豫ての部署に従ひ、第一、第二及び別働第二旅團は、城山の東北隅に突出せる堡壘に、別働第一旅團及熊本鎮臺兵は、西面より城山の中央方面に、第四旅團は北面より岩崎谷に、第三旅團及新選旅團は東南面

三十歩 (01)

0120

より、城山の正面に向ひ、淨光明寺山に放列を敷ける攻城砲隊(司令官)及び上ノ原に在るクルツ砲(近距離砲)より撃出す、熾んなる掩護砲撃の下に、四面齊しく敵壘に肉薄した。聯隊の選抜兵は山根少佐指揮の下に、池ノ平山より新照院坂上左側の壘に迫り、之を奪取したる後一小隊を此に殘置し、爾餘の隊を三分して、友軍諸隊と共に岩崎谷及び其の左右の山中に、銃槍を揮つて突入し、抵抗する者は悉く刺殺し、降る者は捕虜とした。斯くて首魁隆盛以下桐野・村田・邊見・池上等の幹部は、悉く城山の朝露と消えて、西南の賊徒全たく平定す。翌二十七日朝有栖川宮征討總督鹿兒島に入らせられ、午後山縣・川村の兩參軍以下各團隊長を破の旅館に集めて、左の令旨を賜ふ。

令旨

賊徒猖獗多ク月日ヲ經シニ元兇誅ニ伏シ西陲全ク安シ我天皇陛下ノ宸襟ヲ慰セララル、果シテ如何ジャ、是卿等各將校其指揮ノ宜シキヲ得下士兵卒ニ至ルマテ殊ニ威奮勸勵事ニ從フノ致ス所ナリ、余深ク之ヲ喜フ、爰ニ本營ヲ此地ニ移シ乃チ卿等ヲ招キ、聊微衷ヲ表ス、其佐尉官ノ此席ニ列セサル者及下士兵卒ニハ卿等幸ニ予カ意ヲ傳示セヨ
尋で各旅團の編成を解き、凱旋を命ぜられ、諸隊逐次歸營の途に就きたるが、鎮臺兵は十

月五日川尻に集合したる後、谷少將自から之を率ゐて熊本に凱旋した。
願みれば開戦以來茲に八閱月、其の間或ひは四面楚歌聲裡に在りて、援絶え糧盡くるの時
に當り、纒かに愛馬を屠り、粟粥を擧りて飢を凌ぎ、以て孤城を累卵の危ふきに支へ、或
ひは暴雨疾風、浪霧咫尺を辨せざるの曉、赤松・豆蔻峠に賊の來襲を拒ぎ、峭壁を攀ち荆
棘を潜り、躬を棄て、苦戰奮闘、或ひは滄風沐雨、山河百里の險を越え、懸軍長驅遂に賊
の巢窟を覆す其の困苦辛酸は、筆紙の能く竭す所にあらず、其の赫奕たる武勳、又口舌
の能く悉す所でない。

三十歩 (66)

0122